地域創造コース基礎ゼミ報告（2020 年度）
「自然を糧にする営みに学ぶ」

村田 周祐・川畑 耕一・山名 康大・藤井 瞬・永井 悠斗・合田 千夏・三代 健太郎・
坂本 就希斗・山下 純一郎・橋田 凛

Studies of Regional Creation Basic Seminar :
Learning from Activities Feeding on Nature

SHUSUKE Murata, KOICHI Kawabata, KODAI Yamana, SYUN Fujii, YUTO Nagai,
CHIKA Aida, KENTARO Mishiro, JUKITO Sakamoto, JUNICHIRO Yamashita, RIN Hashida

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第17巻　第3号　抜刷
REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.17 / No.3
令和3年 3月 26日発行　　March 26, 2021

地域創造コース基礎ゼミ報告（2020 年度）

「自然を糧にする営みに学ぶ」

村田周祐*・川畑耕一**・山名康大**・藤井瞬**・永井悠斗**・合田千夏**・
三代健太郎**・坂本就希斗**・山下純一郎**・橋田凛**

Studies of Regional Creation Basic Seminar:
Learning from Activities Feeding on Nature

SHUSUKE Murata*, KOICHI Kawabata **, KODAI Yamana **, SYUN Fujii **,
YUTO Nagai **, CHIKA Aida **, KENTARO Mishiro**, JUKITO Sakamoto **,
JUNICHIRO Yamashita **, RIN Hashida **

キーワード：実学教育，地域連携，農業，林業，漁業
Key Words: Practical Education, Regional Cooperation, Agriculture, Forestry, Fishery

Ⅰ．本稿の意図と内容

本稿の目的は，地域とのかかわりのなかで創発される「学び」を記録することにある。超学際としての「地域学」の側面，つまり座学のための座学でも，実践のための実践でもなく，両者を有機的に結びつけていく実学教育の記録である。具体的には，2020（令和 2）年度後期に地域学部地域学科地域創造コース 1 回生を対象とした「基礎ゼミ（村田）」の記録である。

近年の地域課題は総じて「オバーユーズ」から「アンダーユース」へと移行している。例えば，第一産業をめぐる地域課題は「土地不足（担い手過多）」から「担い手不足（未利用過多）」へと移行し，「耕作放棄農地」「間伐遅れの林地」「放棄漁場」として顕在化している。しかし，こうした現象は統計データとして形式的に把握することはできたとしても，その「内実」に触れることは難しい。なぜなら，地域課題の具体的な現れ方は，各々の自然や地域の歴史的文脈に応じて異なるからである。

ところが，その「内実」に即した学びを提供することは大変に困難である。例えば農業であれば，農業技術を圃場で実習として学び，地域課題としての農業を教室で座学として学び、それらを地域の現場に即して有機的に結び付けることが難しいからである。そこで本授業では，「自然を糧にする営み（農・林・漁）」の現場に身体を没入し，実践者と協働するなかで地域課題の内実を「知る」から「分かる」へ転換させる実学教育を目指した。

本授業は「自然を糧にする」をテーマに，外部講師らが講義内容を独自に展開し，村田は全体のコーディネートに徹した。屋外活動の安全を確保するために，それぞれの活動への参加学生の人数制限を行った。そのため，学生らは全ての活動には参加せず，1 人当たり 3～4 回程度の参加となった。以下が本授業の概要と講師一覧である。

【林業】
・鳥取県智頭町：赤堀農林代表　赤堀宗範
・鳥取県智頭町：（株）Try’s 代表　橋本登志郎
【華道】
・鳥取県智頭町：（株）皐月屋社員　小谷洋太
【漁業】
・鳥取県青谷町：鳥取県漁協夏泊支所
【農業】
・鳥取県智頭町：森のうまごや代表　岩田和明

以下が，地域とのかかわりのなかで生まれた実学教育の成果である。

*鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース
**鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・1 回生

Ⅱ．学びの記録

1．脱、ないものねだり

川畑耕一

はじめに

これまで人類は進化、進歩を続けてきた。効率や利便性を追い求め、様々な発明や機械化を行ってきた。そしてそれが当たり前の時代に生まれた私は、便利なものや私たちの生活を楽にしてくれるものは良いことだと考えていた。しかしながら、今回基礎ゼミを通して林業や農業などの様々な体験をし、便利で私たちの暮らしを楽にしてくれるものが必ずしも良いという一言で終わるものではないと気づかされた。

1）ありのままの農法

2020年10月11日、私は智頭町で農業をしておられる岩田さん一家のもとで農業体験をさせていただいた。その内容は一人一本鎌を持ち、稲を刈っていくというものであった。私はこれまでに稲の収穫を経験したことがあった。その際はコンバインで収穫した。コンバインでの収穫と比べて、鎌を使った手作業での収穫は想像以上に大変だった。鎌を持ち、稲に触れ一束ずつ刈る。当然根元から刈るため腰を下ろす必要があるし、刈った後は決められた置き場まで戻る必要がある。この作業だけでも大変なのに、虫が多く土はぐちょぐちょで足場が悪かったためより一層辛かった。私は虫に対してあまり抵抗がないため良かったが、虫嫌いな人にとってはたまらないだろう。足場が悪いため稲を置き場に置きに行く途中で何度もこけそうになった。数時間ほど作業をした後、全体を見渡したが想像の半分ほども進んでいなかった。結局、十数人で半日ほど作業をしたが、田んぼ一面の稲を収穫しきることはできなかった。当初、私は「手刈りは大変やけど、頑張れば終わるだろう」と考えていたが甘かった。そのような大変な作業を一人でやっておられる岩田さんの凄さを身に染みて感じた。

図 1：はせがけの様子

私は手刈りで収穫した稲は機械で収穫した稲と比べて、非常にきれいであることに気づいた。育て方の違いもあるだろうが、稲の一本一本がしっかりしていた。農薬などの助け無しに、自分たちの力で育ってきた稲の生命力を感じた。コンバインでの収穫は確かに早いのだが、稲を刈り切れず倒してしまうこともある。一方、手刈りでの収穫は一本一本行うため稲が倒れることもなく非常にきれいに収穫できる。私は手刈りでの収穫を初めて体験し、非常に大変であると感じた。しかしその一方で良かったこともある。それは作業を通して一体感が生まれたことである。私はゼミの課外活動に参加するのはこの日が初めてだった。初めてゼミのメンバーや村田先生、先輩たちと共に活動をした。稲を刈る役、刈った稲を縛る役、縛った稲を干す役などに仕事を分担し作業をした。作業をしながら様々な人と話すことができた。作業の後半は前半よりも効率が上がっていた。仕事に慣れてきたこともあるだろうが、仲間とのコミュニケーションが増え協力することが多くなったことが大きな理由だと感じた。またやりがいを感じることもできた。実際に稲に触れ一束一束刈っていく。刈り取った稲を縛る役に渡しに行き、また刈りに戻る。自分は今現在稲刈りをしているという実感が明確にあった。これらのような感情は1人がコンバインに乗りすぐに収穫してしまう機械での収穫では感じにくいことであった。

岩田さんは農薬を使用しない。農薬を使うことで虫が死に、今の畑のバランスが崩れてしまうかもしれないためだそうだ。私は岩田さんの農法から、岩田さんは今あるものを見て大切にしていると感じた。普通の農法では効率を上げるために、その場の環境を変える。農薬で害虫を駆除し、案山子を立てたり電柵を張ったりして害獣が近寄らないようにする。このように邪魔なものを排除して自分たちの理想の環境に作り変えていく。一方で岩田さんは農薬を使わないし、田んぼから蛇が出てきても駆除しない。「蛇は臆病だから優しくしてあげて」と岩田さんはおっしゃっていた。岩田さんはその場の環境を受け入れ、その環境をありのままに活かして農業をしているように感じた。岩田さんが田植えから収穫まで全く機械を使わないのはこのような考えからなのではないだろうか。

こうして自然の力で育てられた岩田さんのお米は、通常のお米よりも高額な価格で売られるそうだ。確かに機械や農薬は便利だ。だが岩田さんのお米のように、単に便利なものに頼るのではなく今あるものに注目しそれを活かす。そうすることで便利なものに頼るだけでは生み出せない素晴らしいもの（例えばありのままに育てられたお米）を生み出すことができることもあると私は学んだ。

2）廃村の中の憩いの場

2020年10月24日、林業をしておられる小谷洋太さんに連れられて、智頭町にある板井原集落を訪れた。板井原集落は廃村であり、私はそのような場所に訪れるのは初めてであった。

図 2：廃虚の様子

私は廃村とは暗く静かで不気味なところだと想像していた。実際、今にも屋根や壁が崩れ落ちそうな家や窓ガラスが割れ蜘蛛の巣だらけの家があった。洋太さんによると、現在板井原の住人は１人であるらしい。そんな状況であるにも関わらず、道中に並んでいる地蔵はきれいに手入れされていた。最も驚いたことはカフェを経営されている女性がいたことである。実際にカフェを利用したのだが、店内は明るく飾られており非常にきれいだった。ここではコーヒーのほかにオレンジジュースやニンジンジュースなどを飲むことができた。

廃村の中にカフェがあると知ったとき、私は「誰が利用するのだろう」と考えた。廃村とは文字通り廃れており何もない､それが私のイメージであった。そのため、廃村の中にぽつりと一つのカフェがあるというのは本当に異様に感じた。だがそのような状況でも経営できているということはある程度の利用客がいるのだろう。実際、智頭町から来られる方は多く、ちょっとした憩いの場となっているそうだ。私はこのカフェにいる間、自分が廃村の中にいるということを忘れかけていた。自分が今いる場所が廃村だと感じさせず気味が悪く感じたり違和感を覚えたりしない、とても落ち着くカフェであった。私のように感じるお客さんは多いのではないだろうか。だからこのカフェは人々が集まる憩いの場となっているのではないかと感じた。廃村を放置したり取り壊して新しいものを建てたりしない、むしろ廃村をうまく活かし人々の集まる場所となっている。岩田さんの農法と同様に、このカフェからも今あるものを見ることの大切さを学ぶことができた。

図 3：カフェの様子

3）己をもって初めて見えるもの

2020 年 11 月 28 日、智頭町で林業をしておられる赤堀さんのもとで薪割り体験をした。初めは恐怖心や自分にできるのだろうかといった不安の気持ちがあった。しかし赤堀さんのご指導の下、何度か薪を割っていくと楽しいと感じるようになり、恐怖心など全くなくなってしまった。一振りごとに斧に込める力が強くなっていった。うまく薪を割ることができるととてもすっきりした。難しい数学の問題を頑張って解き終えたときや大きなパズルを完成させたときのような、そんな爽快さを感じた。特に一発で薪を割れた時は本当に気持ちが良かった。自分の腕で斧を持ち、自分の体を使って斧を振りかざす。パンっという音とともに目の前の丸太が二つに割れる。自分が割ったという達成感、高揚感を味わった。結局私はお昼休憩の時間も薪割りをするほど没頭してしまった。

これまでに岩田さんの農法や板井原集落にあるカフェを見て、私は今あるものを見ることの大切さを学んだ。そうすることで見えてくる素晴らしいものがあるからだ。それは質の高いお米や人々の憩いの場となるカフェであった。今回も同様に、今あるものを見てその環境のありのままに薪割りをした。斧があるから斧を持ち、自分の身をもって薪割りをすることで見えてくるものがあった。それは「薪割り」という行為そのものであった。どういうことかというと、斧を持ち自分の体を使って薪を割ることで様々なことを知る。斧や薪の重み、薪割りの苦労や爽快感など。また気持ちよさを感じるなどの良い面から、けがの危険や体が疲労するといった悪い面まで。そういった「薪割り」に伴う多くの情報や感情を実際に体験することによって知ることができたということである。だが薪割り機を使って薪を割った場合、これらのことは感じられない。同じ「薪を割る」という行為でも私たちの行動や抱く感情は全く異なるのである。今あるものを見ること。そうしてできた岩田さんのお米や板井原集落のカフェは目に見えるものであった。岩田さんのお米が通常のお米の５倍以上の価格で売れたり、カフェに人が集まり憩いの場となったり、そうしたことは数値や目でとらえることができた。しかし今回の薪割りは見えづらいように感じた。実際に薪割りをしている様子を見ると「きつそうだな」とか思うかもしれない。しかし本当のところは自分の体で経験してみなければわからない。私は薪割り体験をして今あるものを見ること、実際に体験することの大切さを学んだ。

4）今あるものを見ること

岩田さん、洋太さん、赤堀さんの３人のもとで機械を使わない農業や廃村見学、薪割りなどの貴重な体験をさせていただいた。その中で私は「今現在その場にあるものに注目し、そしてそれを大切すること」の重要さを、身をもって学んだ。便利さや楽さを追い求めることは確かに大事だ。私たちの生活を豊かにしてくれる。だが全てにおいてそれらを優先するのではなく、今あるものを見てそれらを大切にし、活かそうとする。そうしたことが私たちの生活を本当に豊かにしてくれるものにつながるように感じた。

私たちの生活はせわしない。インターネットが普及し様々な情報を目にするようになり、何が正しいのかさえ分からなくなってしまうこともあるのではないだろうか。また「お金や時間が足りない。もっともっと欲しい」といったおもいが常に付きまとってならず、満たされない気持ちでいっぱいだ。そんな中では一見、より便利でより楽なものが正しいと思い込んでしまう。しかし効率や利便性、楽さを求めるだけでは気づけないもっと素晴らしいものがあるのではないだろうか。そのことに岩田さんや洋太さん、赤堀さんにお世話になって気づいた。例えば薪割りであったり、自然の手だけで育てられたお米であったり。それらに気づくためには、ないものばかりを求めるのではなく今あるものに注目する「脱、

ないものねだり」が必要だ。足りないものばかりに目を向けるのではなく、その場にあるものに目を向けること、そして実際に自らの体をもって体験することが重要であると私はゼミを通じて学んだ。ゼミを通じて学んだことはすぐには私の生活には浸透しないかもしれない。しかし私の生き方や考え方に影響を与えてくれたことは確かだ。まずは今現在の自分、自分の周りにあるものを見つめる。そしてそれらを大切にし、感謝して生きていくことができたらと思う。

2. 自然と向き合う仕事から感じた生きざま

山名康大

はじめに

今年はコロナウイルスが流行り、大学生活も日常生活も不自由が多かった。特に大学はオンライン授業が基本であり、フィールドワークで実社会と関わる機会もなく、座学で地域の課題などをひたすら聞き、レポートにまとめることばかりをしていた。そんな中、このゼミではフィールドワークを数多く体験し、様々な視点や考え方を学ぶことができた。おそらく、フィールドワークといってもこのゼミのフィールドワークは他とは全く異なる趣旨のものであるだろう。地域に出て生活実態の調査や、山村地域の現状を目で確かめレポートにまとめるといったことが僕の思うフィールドワークだった。このゼミでは、実際に働かれている人々のもとへ行き、僕たちの講師になってもらう。そして日々されている仕事内容を見学したり、体験したりする。そのようなフィールドワークだからこそ得ることのできたことや考え、人との関わりが多くあった。当初は、様々な体験を通して田舎を知ることができたらいいくらいに思っていた。ところが、フィールドワークを重ねるなかで、田舎を知ることはもちろん、さらに奥の深い何かをつかみ取り、感じられた気がする。以下では、その気づきについて書き進めていきたい。

1）3人の林業家

1-1)都会を捨ててまで林業をする意味

10月上旬、初のフィールドワークが行われた。大学から車で1時間弱の智頭町で林業を営まれている橋本さんをお訪ねした。智頭町は町の97%が山に囲まれているという生粋の林業のまちであった。僕の地元は兵庫県神戸市であり、海と山に囲まれた狭い土地に建物が密集した自然とはかかわりの薄い場所である。そのため、僕にとって智頭町のような場所は空気の綺麗さや、どこを見渡しても山がそびえたつ風景が新鮮であったのと同時に、スーパーなどが道中に1つか2つしか見なかったうえ、交通網もそこまで発達していなかったので不自由も多そうだなと正直感じた。とはいえ、自然が好きな僕にとって山に囲まれ、澄んだ空気の中で活動することに興奮していたことを今でも鮮明に覚えている。この日の作業内容は、橋本さんが実際に日々行われている、伐倒と道付け作業の見学、そして焚火であった。僕のこれまでの生活は林業とは無縁であったし、伐倒や道付け作業はテレビで見たことはあっても実際にみたことはない。そんな僕からすると、橋本さんが木の伐採をしているのをすぐ近くで見たとき、少し恐怖を感じた。それは、テレビの画面からは伝わらない、木のメリメリといった音や、何より切った木が倒れた時に、ドンっと大きな音が霧掛かっていて幻想的な林に響き渡ったとき、静寂とした林の中に大きな音が鳴り響いたという衝撃から非日常にいるような感覚だった。そして木を1本切るのにも刃を入れる位置を何回も変えたり、どの方向に切った木を倒すのかという技術のレベルの高さを目の当たりにした。橋本さんがおっしゃっていた「毎日命がけでやっている」という言葉がそのとき非常に重たく自分の中に入ってきた。

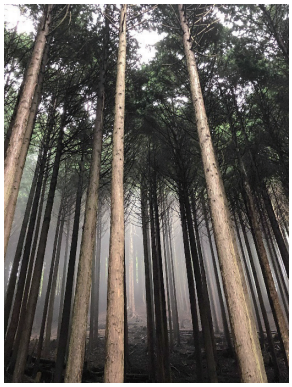

図 4：整備された森

そして作業が始まってからずっと、自然の音に勝手に耳を傾けていた気がする。普段、風の音や鳥の鳴き声、また、車の走行音など身の回りの音を気にすることはないはずなのだが、小川の流れる音、風で葉っぱが揺れる音、地面を僕たちが踏みつける音など、耳をすませばいろいろな音が聞こえてきた。普段とは全く異なる環境に身を置いていたからこそ、そのようなことに敏感になっていたのかもしれない。

その後、山を下り、昼食の準備に取りかかった。ところが、昼食の準備といっても一筋縄にはいかない細工が準備してあった。それは、自分たちで身の回りにある落ち葉などを使って火を起こせという指令であった。二人組で火を起こそうとするのだが、なかなか火がつかない。落ち葉を中心に乾いた枝などを集めマッチに火をつけるがなかなか燃えないのである。試行錯誤を繰り返しているうちに村田先生が松の葉や枝を持ってきてくれた。松には油分が多く含まれているらしく瞬く間に燃えあがり、火がついたのだ。普段、ボタン一つで温まっていく生活に慣れている僕たちからしたらそれは驚きであり、都

市生活ではつかめないどこか人間の生きるうえでの本能や知恵を体得できた瞬間だった。講師である橋本さんも、都会でサラリーマン生活を数年前まで送っていたそうだ。そんな都市暮らしを通過してきた橋本さんは､｢都会暮らしと智頭での田舎暮らしを比較した時、収入や安定性はもちろん前者のほうになるが、楽しさや満足感、未来を考えたことなど、働くというより生きがいを感じられるのは後者だ｣とおっしゃっていた。どっちが正しい生き方かということに答えはないはずだが、第三次産業に就く人が大多数を占める現代において、それを捨ててまで林業に就き、自分の理想のような生き方を実際にされている生きざまにカッコよさを感じられた。

1-2）こだわるべきところをこだわる

10 月下旬、この日は智頭の林業家である小谷さんを講師に登山へ出掛けた。登った山は、標高 900m 強であり､苦労したというよりは気持ちよく登ったという印象だった。小谷さんは、道中で林業家ならではの視点から整然と木が植えられた人工林と無秩序に木が並んでいる原生林の見分け方を教えてくれた。そうかと思えば、華道家ならではの視点からも、道に生えている草や花の解説や説明をしてくださった。そうこうしていると、山頂にたどり着いた。快晴の山頂からは智頭町全体を見下ろすことができ、97%が森林であると聞かされていた事実が、自分の目で確認することで実感を伴って納得させられ、景色が広がっていた山頂での小谷さんの話は、同じ林業家でも前回の講師であった橋本さんとは異なる視点や考え方を感じさせるものだった。小谷さんは、林業家であると同時に華道家としても活動されている。そのため、木というよりは山全体を稼ぎの場として捉えられていると感じた。当然ながら、稼ぎの場だからといって、過度な伐採や自然の花木を採り過ぎないこと大切にしておられ、自然を手入れするといったことはもちろん、その自然から稼ぎを得、自然と向き合いながら自然とともに暮らしているのだなと感じた。

図 5：山頂で一息

僕が小谷さんの話で最も印象に残っているのは、こだわりある生きざまという点であった。例えば、生け花の場合、一般的には花屋の店先に並んでいる外国産の大量生産された花を買い求め、我々は仏壇や花瓶に飾る。しかし、小谷さんは、先祖に花を手向けるには、近所の山で取れた花でするべきだといった考え方にこだわっている。さらに、林内に作業道をつける場合は､ただ実用性を求めるのではなく、見栄えや何年後かの将来に周囲の森となじむようにするといったこだわりを持たれている。ほかのだれかが気付かないような点でもこだわるというところが僕自身こだわりの強い身である分、非常に共感させられた。そのようにして自分の仕事場を自然とうまく生かして大切にし、自然のものを一工夫やこだわりなどで何気ない花や山に価値を見出すといったことから、自然そのものの美しさや華麗さ、また、丁寧に手入れなどをしていても時には自然の脅威によって一瞬で壊れてしまうという儚さのようなものも感じ取れた気がした。

1-3）生きるように働く

三人目の林業家は、11 月下旬に智頭の那岐で、火のある暮らしというテーマで講師をしていただいた赤堀さんだ。この日は、僕にとっては 3 回目の智頭であった。そのためか、これまでとは異なり約 1 時間の移動が長く感じられず、見慣れた景色の中を進んでいく感覚だったことを覚えている。多少の雨が降る中、車を降り立った僕はまず正面に建つ茅葺き屋根の家に驚き、現代住宅がそっけなく思えるほどの威圧感や重々しさとかっこよさを感じた。現代において、茅葺き屋根の家屋は、大学周辺はもちろん中山間地でもなかなか目にすることはできない。僕自身、実際に見たことは数えるくらいの回数だし、講師の赤堀さんは林業一家の 15 代目だそうで､木を育て、木を切り、薪を割って日常に用い、木とともに暮らしているという印象だ。

午前中の講義は薪割が中心だった。薪割りとは縁のない生活を送る僕らは、簡単そうに薪を割っていく赤堀さんを見て真似るが、どうもうまく割れない。斧が木に入らなかったり、狙ったところに当たらなかったりし

図 6：薪割りに没頭

て苦戦した。腰を落としてやってみるとうまくいく子もいた。何事もコツなのだなと改めてここで思った。そして、僕自身コツをつかんだので、思い切り丸太に向かって斧を振り下ろす。あとは狙ったところに落とすだけといった感じであったが、それも次第に狙い通りに命中してきた。それから夢中で木を切り倒し、気づけば自分の周り 360 度薪の山ができていた。こういった昔ながらの薪割をする機会などほとんどないので、楽しくて仕方なかった。昼食はドラム缶でつくられたピザ窯でピザをみんなで焼き、腹いっぱいごちそうになった。薪割りで疲れた全身が手作りピザを格別においしく感じさせた。

薪割りとピザづくりが一段落付くと、赤堀さんと 2 人の若い女性講師が林業に対する思いなどを語る場が設けられた。その中で僕の心に特に残った言葉がある。それは「生きるために働く」ではなく「生きるように働く」という赤堀さんの言葉だ。赤堀さんは林業の一家に生まれ、小さいころから林に囲まれ育ってきたのだろう。茅葺き屋根の家で薪を割り暖をとる暮らしから、自然を無駄なく使い共に生きているのだなと思った。それは現代社会ではほとんど不可能な、本当の人間の営みがあると感じた。特に印象に残っているのが、赤堀さんの推測ではあるが、家の近くで取れた木を使って家を建てる、智頭の木を使っているから家のある智頭の気候に合う、よって長持ちするという言葉であった。すごく納得した。山に囲まれた土地で、尚且つ山とかかわる一家に生まれ、自分も山に携わっているという赤堀さんならではの生きざまそのものというような言葉だった。生きるために何かを必死にやるというよりは、身の回りの気候、雰囲気、人間関係などどれをとっても、穏やかでゆったりとした空気に身を任せながら、人としての本来の営みがおこなわれていると感じた。自然とともにある生きざまにうらやましさを感じられた。

2）豪快さと丁寧さを持つ漁師たち

10 月半ばになろうとするころ、夏泊という漁村の漁師さんたちに定置網漁船に乗せてもらい、仕事を見学させてもらう貴重な体験をさせてもらった。全フィールドワークが終わった現在から振り返ると、この定置網体験だけは他の体験とは全く異なるものであり、林業とは 180 度異なる体験であったといえる。

早朝、空もまだ暗い中、車で 30 分くらい走り夏泊の漁港に着いた。漁師の朝は早く、日が昇ると同時に港を出発した。この日は海が荒れていたらしく、序盤から船の揺れは大きかった。港で準備をしていた漁師さんたちは優しいおっちゃんといった雰囲気であったが、港を出て湾内から沖へ向かうと同時に目つき、表情ともに海の男といった様子に変わっていった。時折、語気を荒げながら喧嘩でもしているのかと思うほど激しく迫力のある会話を聞き、やはり命がけでやっているのだなと思ったのと同時に、沖と陸のメリハリに驚かされた。沖のポイントに到着すると、すぐにロープを落としたり引き上げたり結んだりといった操業作業が始まった。僕たちは邪魔にならないようにと必死に避け、端の方で見学させてもらった。長年のキャリアを感じたのは、大きく揺れている船上でロープを結んだり別の船に即座に移動したりといった一つ一つの動きにミスなく適切なタイミングで行われていたことだ。その姿はただただかっこよかった。操業途中に、僕たち学生の何人かは揺れと魚やガスのにおいで酔っていた。ところが僕は、船の揺れに海上に出てきたことを実感し、網の中で跳ね回る魚の量に興奮し、魚のにおいもエンジンの煙も気になることはなかった。

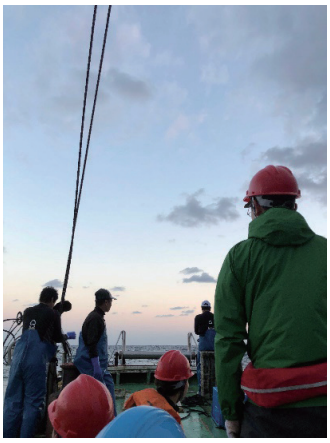

図 7：出港

林業や農業といった他の 1 次産業と漁業が異なる点は、売り物になるものが日によって数も種類も異なり、それはだれも予想がつかないという点にあると思う。この日の漁獲量を見て、僕はてっきり大量だと思っていたが、実際は前日の 4 分の 1 ほどだったらしい。そんな、毎日が予測つかないからこそ、一回一回の漁に掛けているということが非常に伝わってきたし、その必死さからああやって声を荒げながら仕事をしているのだなと実感させられた。僕も網の中の魚をタモですくうという体験をさせてもらったが、かなり重く、何回すくっても魚の数は減らない。この量で本当に前日の 4 分の 1 かと疑うほどであった。沖での操業が終わり港に帰港していく船上では、漁師たちはみな穏やかな表情に戻り、煙草をふかしながらのんびりされていた。自分たちの収入が目の前にあり、その日の漁獲量がどれだけかも予測つかない中、ある程度の漁獲量を得られた日は穏やかな表情になるのかもしれない。その表情に漁

師たちの生きざまや、獲れたものそのものが稼ぎに直結するという職業の難しさ、一回一回に掛けるが故の自然との闘いからくる気迫を感じられた。港に戻り、選別や発泡スチロールに魚を詰める作業を終えると、漁港の奥にある一部屋に招待された。そこではすでに、仕事を終えた 10 人弱の漁師たちがビールを片手に大声で笑いながら談笑を交わしていた。漁師たちはそれぞれ、ビールを飲まれている方、僕たちに魚をさばいてくれている方、奥の大量に缶ビールがはいった冷蔵庫から数本の缶をとってこられてプシュッと勢いよく缶ビールをあけられている方、談笑されている方など、自由気ままにそれぞれの時間を過ごされていた。この風景を見た瞬間、漁師たちの本当の素顔を見られた気がした。たとえ、前日の 4 分の 1 の漁獲量だったとしても酒をみんなで飲みあえば、そのようなこともどうでもよくなるのだろう。ただただ楽しそうにおしゃべりをされている光景を見て、1 次産業の収入や安定性が難しいといわれる半面、自由さを併せ持つといわれるが、まさにその自由さや愉快さを目の当たりにすることができた。先ほど取れたシイラをきれいに捌いていただき、刺身として食べさせてもらった。シイラは安い魚と聞くが、鮮度抜群なため最高においしかった。そして漁師さんに「お前も飲むか？」と僕にもビールをくれた。ただただ最高だった。この 1 杯のために漁に出るといっても何の異論もなかった。漁師たちはこの瞬間に生きていると感じるのだろう。これだけ朝早くから起きて、日の出とともに仕事が始まる。そして午前のうちに仕事が終わり、朝 10 時には皆で乾杯。そこからは酔っ払い、時には繁華街に出てスナックなどに行く。ただただ陽気で、僕たちにも非常にフレンドリーにかかわってくれた漁師たちのこういった、上に書いた 3 人の林業家の真面目さやおとなしさとは異なる、いい意味での遊び人といった感じがまさに漁師の生きざまだと感じた。船上で大声で指示しあったり、飲むビールの勢いといった豪快さと、荒れた船の上での細かい作業や、港での魚の選別といった仕事での丁寧さを併せ持つ漁師たちの仕事ぶりに驚かされながらも、人間味にも触れられた体験だった。

3）生きざまから見る人のあるべき姿

このゼミのフィールドワークは他のそれとは趣旨の違うものであり、体験型であるといったことだけではなかった。林業、漁業と体験してきたが、それぞれのフィールドワークの講師たちの生きざまから人間の営みについて考えさせられた。どの講師も自然と向き合う仕事をされている。そこに僕個人は非常に魅力を感じることができた。自然と向き合う仕事は、気候や動植物などの自然環境を気にしながら仕事をしなければならない。一見すると、現代社会において主要であるデスクワークのほうが楽で効率的な仕事を行えるかもしれない。しかし、そんな今の日本人の便利なものに囲まれた生活ではできないことだらけだからこそ、例えば、火を起こすために、周りにあるものだけでなんとかする、といったような人間の生きるうえでの本来の営みというか、人間の原点のような活動を学んだ気がする。そして、そこでただ生きるために何かをするというのではなく、周りの環境に身を任せつつ、上にも書いたような自然とともに生きるということを皆されており、自然に対する価値観なども感じることができた。そういった姿勢から、これまでの地元での暮らし、現在の大学生としての暮らし、つまり時間に追われ便利なものに囲まれることを当然とした日々では気づかなかった、モノゴトとのかかわり方や考え方を学ぶことができた。その意味では、学校の教室でただ座ってメモを取っているだけでは不可能な学びばかりで、実際にやってみるからこそモノゴトに関わる気づきがあるのだと実感させられた。さらに、よく世間で言われる「価値観」も同様なのだと強く確信した。これから大学生活で、私は様々なことを学ぶだろう。そのうえで、このゼミで経験した学び方を生かすことで、私たちが直面する地域課題の解決に役立つことがあるのではないかと思っている。そのように考えると、ただ田舎暮らしを体験するだけでなく、人の生きざまに触れ、その土地やモノゴトに対する考えや行動、そしてそこに生まれる価値などを学ぶことのできた、今回のフィールドワークに参加できてよかったと思う。

3. 自然・環境に良いへの違和感

藤井瞬

はじめに

林業、農業と聞くと、私は林業には重機などを用いて大量に木を切っている、農業にはコンバインなどの農機や肥料を使うといったイメージを持っていた。そしてどちらも自然と近く自然に良い産業であると思っていた。しかし自分のイメージとは全く違う林業、農業を体験し、そこから感じた自然、環境に良いとは何かを考えていく。

1）「自然に良い」林業とは

上述したイメージを持っていたため、村田先生から木を切らない林業を見学にいくと言われたときは、「それって林業なのか」と疑問に思った。しかし木

を切ることだけが林業ではなく、例えば山に入るためや切った木を運び出すための道付け、過密にならないために木を切る間伐、植え付けや増えすぎた鹿の駆除なども林業の仕事であり、間伐や鹿の駆除は山の自然、環境を守り、多くの人達や世代が関わり木を育てていることを知った。だから自然、環境を守り、次へつないでいくことが林業なのだと感じた。一方で、国家政策は「環境に良い」ということを理由に、バイオマス燃料などのために木をどんどんと切ろうとしていると聞いた。この「環境に良い」というのは見てくれの数値やデータ上のものであると思った。

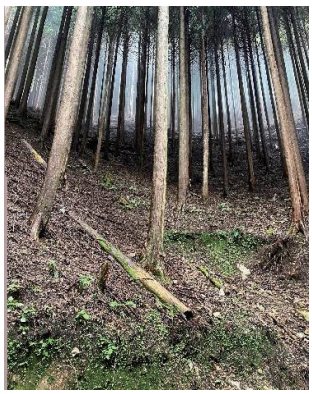
図 8：つながれてきた森

私が、智頭で出会った「環境に良い」とは、そこに実際にある環境を守っている、守っていこうとすることだったと感じた。例えば、木を伐りすぎることや重機を入れるために道を広くすることは、土砂崩れなどの災害につながる。そうかと思えば、逆に木を全く切らなければ生物の多様性が失われ、これも土砂災害や鳥獣被害へとつながっていく。

このゼミで智頭の林業に触れる中で、本当に自然にとって、環境にとって良いこととは何なのだろうかという問いが私の中で生まれてきた。そして、講師の方々の言動から、人工林でいえば、放置するのではなくきちんとした管理が必要であると考えるようになった。放置し自然に任せたり木を切られ過ぎたりした人工林は、土砂崩れや洪水による土壌の流出や地球温暖化の要因となり環境にも悪い結果を招くのだ。そのように考えると、「環境に良い」という理由で、バイオマスのために木の大量伐採をすることは矛盾しているのではないかと感じた。

2）自然農法を通して考える農業と自然の関係

農業に関しても自分のイメージとは180度違った体験をした。自然農法は機械や化学肥料や農薬を使わず、手で稲を刈ったり馬で農地を耕したりする。私にとって馬耕は想像もしていないものだった。機械だと1時間程度で終わる作業であっても、手作業だと十数人で1日行っても終わらない。化学肥料や農薬を使えば、よく育ち病気にならず楽なはずである。どうして機械や化学肥料や農薬を使わない農業をしているのだろうと疑問に思った。

図 9：手で刈る

この疑問を持ちながら作業を行ったり、講師の岩田さんの話を聞いたりしていると、あることに気づくようになった。例えば、機械を使えば刈り入れや脱穀を短時間で効率的に行うことができるのは確かである。しかし、刈り残しや刈り入れの際に生き物を殺してしまったり、脱穀時に脱穀されない稲が出たり、化学肥料や農薬は土壌を汚染してしまう。そうしないために使っていないということを聞いた。生き物がいることで土壌などの良い環境が育ち、化学肥料を使わなくともいいような農業ができるのだと思った。実際に私は手で稲を刈っている時や、開墾をしている時などにクモやテントウムシなど、害虫を食べてくれる虫や受粉を手伝ってくれる蝶や蛾、そしてそれらを捕食するカエルやイモリ等多くの生き物と一つの生態系をその田んぼで見ることができた。ところで、私は虫好きだ。その理由は、虫が他の生物とは違って、どこにでもいるかのように思えて、実は探してもなかなか見つけられないからだ。虫のそんなところが好きだ。そんな虫好きの私にとって、この農業体験で最も印象に残ったことは、虫をいたるところで当たり前のように見つけられることだった。虫や他の生物と共に農業をする。自然農法はすごく自然とともにある農業なのだと感じる一方で、自分がこれまでイメージしていた農業に対して言葉にできない違和感を覚えはじめた。

図 10：馬で耕す

3）違和感の正体

国が進めている木を多く切っていこうとする林業も自分がイメージしていた機械や農薬を使う農業もそれが悪いわけではない。現在の日本では一次産業としての農林水産業は衰退していっている。一次産業が衰退していくことにより放置された人工林の増加や食料自給率の低下等多くの問題が引き起こされる。このように、農林水産業を衰退する一次産業として捉え、機械化や大型化などの「効率化」によって経済的利益を上げるという思考は最も単純で分かりやすい。しかし私はこうした思考に対して、どうしても違和感を覚えるようになった。

11月28日のフィールドワークでの守本沙織さんの「自然に対して罪悪感のない仕事がしたかった」という言葉を聞き、この「罪悪感」が自分の感じていた違和感の正体なんだと分かった。自然や環境に対する罪悪感を、今まで考えたことなどなかった。だから違和感を覚えても言葉として言い表せなかったのだ。虫という生物は繊細かつ敏感な生き物であり、自然や環境が悪くなればすぐに姿を消す。私を含め多くの人にとって虫のいない自然に対して違和

感を覚えることはできないだろう。それは実際に虫がいられない世界で生きているからである。しかし、自然や環境が整えば、当たり前に虫が存在する世界を知り、私はその違和感に気が付けるようになった。このフィールドワークを通して感じるようになった違和感、自然や環境に対する罪悪感という考えは大切にしていかなければならず、そして自分考えの軸となっていくものであると考えるようになった。

4. 都市の外から見直す価値

永井悠斗

はじめに

私たちが生活していく中で欠かせない物の一つにお金というものがある。私たちが生活する資本主義社会においてお金は絶対的といえるまでもの価値を持ち、お金をたくさんもっている人は豊かで裕福な人、お金を少ししかもっていない人は貧しい人と決められてしまう。この価値観は資本主義社会に生きるうえで取り除くことはできないだろう。ただ私がこれまでのフィールドワークで出会ってきた数々の出会いの中で、この価値観だけで私たちの社会はできているのだろうかと考えさせられた。そこで、ここではこれまでのフィールドワークでの活動を価値という視点から見つめなおしていきたいと思う。

1）届かない価値（2020 年 10 月 13 日夏泊定置）

朝 5 時に大学に集まり、そこから 30 分ほど車を走らせ夏泊漁港に到着した。あたりはまだ薄暗いが、港では漁師の方々が漁の準備のために忙しそうに動いている。朝 6 時ごろに港を出港し定置網が仕掛けてある場所に移動した。当日は快晴だったが波が強く、その場に立っていることすら難しかった。そんな中でも漁師の方々は船のへりに座って煙草を吸ったり遠くを眺めたりしながら平然とした様子で漁場に向かっていた。しかし操業が始まると船の上では漁師の方々の大声が響き渡っており、その様子から緊張感が高まっているのが感じられた。私は船酔いを起こしてしまい、操業後半の記憶はほとんどないが操業はうまくいったようであった。漁場からの帰港途中に漁師さんがある魚を見せてくれた。それは 10cm ほどの小さくカラフルな魚だった。漁師さんの話によるとその魚は食べられるわけではないが、水族館などにもっていけば 1,000 円ほどで売れるのだそうだ。港に戻るとすぐに魚の選別作業が始まった。網の中から次々と魚が投下されるなか 1m 以上はありそうな大きな魚が何匹も出てきた。こんなに大きな魚が何匹もとれるなら漁師さんはさぞ喜んでいるだろうと私は思ったが、その思いとは反対に漁師さんはいやそうな顔をしている。話を聞いてみると、その巨大な魚はシイラという魚で網の中で高級魚を食べてしまうのだそうだ。その上、シイラは傷みが早くスーパーに並ぶころには傷んでしまうため市場価値がほとんどなく、漁師さんからすると厄介な魚なのだそうだ。作業を終えた後、私たちは漁師の方々と一緒に休憩室で食事を共にした。そこで出されたのは先ほど価値のない魚といわれていたシイラの刺身であった。しかしその刺身を食べてみると今まで食べたどんなに高い魚料理よりもおいしく半身をすぐに平らげてしまった。この刺身にほとんど市場価値が付かず、船の上で見せてもらった 10cm ほどのカラフルな魚に 1000 円もの価値が付くと思うと、そこには私たちの普段の生活には届いてこない価値があるのだと感じた。船の上で見せてもらった小魚は例えば水族館に運ばれたなら、多くの人の目に届くことで都市部の生活に溶け込んでゆく。その一方、シイラが港から出ていくことはなく美味しさという面では十分に価値を有しているにも関わらずシイラが都市部の生活に届くことはない。いわば届かない価値なのだ。

図 11：シイラの刺身

2）見出される価値（2020 年 10 月 11 日　11 月 7 日 岩田一家　稲刈り・馬耕・開墾）

大学から高速を車で走り 40 分ほどすると、山に囲まれそばには川が流れているという誰もがイメージするような日本の田舎の景色が広がっていた。この地で自然農法を用いて米を作っている人がいると思うと会うのがとても楽しみであった。私もサークルの活動で米を作っているが、そこではサークルのメンバー約 30 人で農薬と機械を使って米を作っている。そのため機械も農薬も使わず家族のみで米を作っているということに対してどんな米が育つのか、どれほどの労力がかかるのかなど様々な興味を持って活動に向かった。田んぼに到着し一通り作業の説明を受け、実際に米を収穫しに行くと想像していたよりも立派な米がたくさん実っていた。午前 9 時半ごろから稲刈りを開始し、これを刈り終えたらどれほど収穫できるのだろうと考えながら稲を刈り続けた。休憩をはさみながらも作業を続け、日も落ちてきたが一向に作業が終わる気配はなかった。サークルでは機械を使って収穫するがその時は機械の上に座り、機械を進める方向にだけ気を配っておけば 1 時間もかからず収穫は終わる。一方、自然農法を用いた収穫は稲を刈り取る位置などにも気を配りながら収穫を進めていくため比較にならないほどの労力がかかるのだと感じさせられた。こうして初めての自然農法体験はへとへとになって幕を閉じた。

図 12：立派に実った稲

初めて岩田さんの田んぼに伺い農作業を手伝ってから約一カ月たち、今度は馬耕と脱穀の体験をさせ

てもらうために再び岩田さんの田んぼに伺った。10月 11 日に農作業を手伝った時は馬を見ることができなかったため、私は今日こそ馬を見ることができるのだとわくわくしていた。田んぼに到着するとすでに馬が田んぼに放されており草をもぐもぐと食べていた。それを横目で見ながら脱穀を行い、次に馬耕体験に移った。気まぐれに足を止めたり急にスピードが上がったりする馬と歩調を合わせながら耕していくのは非常に難しく、ハンドルを握り自分の思った一定のペースで進ませて行く機械との勝手の違いを感じさせられた。作業をしている中、村田先生と岩田さんの話が耳に入ってきた。話を聞くとここで育つ米は市販の米よりも高額な価格がする「馬耕米」になるのだそうだ。しかも特に人気なのはヨーロッパであり、馬を使っているというのがどうも向こうではうけるらしい。

図 13：馬で育てる

この話を聞いて私は物流に乗り製品として様々な場所に届くようになれば物はどこまでも届き、そしてこの世界のどこかでその製品とマッチする需要を持った地域があった時、製品に価値が生まれてくるのだと感じた。また、すべてを手作業で行い原点回帰ともいえるし悪く言えば非効率的ともいえる馬耕が現代の最先端の物流によって数千キロも離れたヨーロッパに渡り、そこでヨーロッパのトレンドにマッチして価値を見出される様子はさながら過去と現代の融合に思えた。

3）フィールドワークの中で見えてきたもの

時折基礎ゼミの中で都会は食べ物を作れないという言葉を聞く。そしてその都市を生かしていくために物流が存在する。私がこのレポートで挙げたシイラと米との決定的な違いは物流に乗って都市に届けることができるのか否か、つまり現代の社会のシステムにマッチしているかどうかというところがポイントである。初めから両方とも価値は持っているがシイラの場合は都市部に届かないがゆえに無価値とされ、米の場合は都市部に届くがゆえに更なる付加価値を見出されるのだ。

ただどちらがいいといったそういう物差しでは測れないものがそこにはあると感じる。私が初めの部分で価値というアバウトな設定から入ったのもこのためである。実際岩田さんもお金儲けをするために馬耕をしているわけではなく生きていくために米を作っている。そして漁師の方も市場価値がないからといってシイラを海に捨ててしまうということはしないのだ。いわゆる市場価値や付加価値という経済的要素は都市が決めるものであり、岩田さんや漁師の方々は生きていくために自然の恵みとしてシイラや米を享受しているのだと考える。つまるところ経済的価値などは都市部に住む人々が生み出した後付けの価値観に過ぎず生産者本人からすればさほど重要な問題ではないのだ。また、実際に現地でその地で生きている人たちと食事を共にしたが、そこには生きていくうえで十分なものが存在していた。こうした考えは実際に現地に行き自ら経験しなければ得ることのできなかったため、こうした体験を経ながら自らの価値観も今一度見つめなおしていきたいと思う。

5. 違う価値観や視点に立ち、生きる上での豊かさを考える

合田千夏

はじめに

二度にわたり、智頭町で農作をしながら暮らす岩田さんの下で、自然農法を体験した。現代の農作業といえば、大型の機械や農薬を使用するものが真っ先に思い浮かぶが、それらを一切使用せず、農具や動物と共に最大限に人の手を使用する自然農法は、歴史の教科書の中でしか見たことのない、まったく未知のものであった。

1）こだわりと思いやり

10 月 11 日（日）周りが山に囲まれ、一本の道に沿って和風の古い住宅と田んぼが並ぶ集落へ辿り着いた。稲刈りをする前に、既に刈られた田んぼと稲架掛けを見に行った。田んぼの一面がきれいに刈られており、何列も並べられた稲木に稲がびっしり干されてあった。間近で稲架掛けを見たのは初めてであり、その構造と、これだけの稲を何人で刈ったのかが気になった。一人では恐らく不可能だと思われる田んぼの広さと稲の量であり、私たちが稲刈りに向かった田んぼも同様の広さだった。しかし、当日はゼミの同級生に加え、先輩や岩田さん一家など約２０人の人手があったため、一日あれば１つの田んぼは終えられるだろうと想定した。

一人ひとり手に鎌を持ち、田んぼへ足を踏み入れた。地面に少ししゃがみ稲を掴んだら、根本を鎌で刈り取る。稲は後で干すために束にする必要があるため、ある程度の太さになるまで数箇所の稲を立て続けに刈り取り、ブルーシートが敷かれた場所に稲を集める。残りの人で、集めた稲を縛って稲束を作る。延々とこの作業の繰り返しであった。田んぼの土は湿っているものの、長靴を履いていたため最初は気にならなかった。しかし、ブルーシートの間を何往復もするため、湿っていた地面はすぐにぬかるみ始め、足を取られ非常に歩きにくい状態になっていった。また、稲を刈るときにしゃがむ動作を繰り

返すため、徐々に足腰に疲労が溜まっていった。休憩も兼ね、稲刈りと交互に稲を縛る作業も行ったが、１、２本の稲で太い稲束を縛るという方法が意外と難しく、私はなかなかコツを掴めなかったため、かなり苦戦した。大変な作業であることは想像できたが、その過酷さは想像以上のものであった。しかしどんなに疲れていても、誰から言われたわけでもなく、なるべく穂先を落としたり傷つけたりしないように丁寧な作業を心掛けている自分がいた。直接自分の手で触れることで、稲を大切に扱いたいという気持ちが生まれたのではないかと思う。

全員手を休めることなく黙々と作業を続け、かなりの量を刈ったように感じたものの、昼休憩の合図があった時点でまだ田んぼの半分にも到達していなかった。昼休憩では参加者で持ち寄った食材で作っていただいた味噌汁と、薩摩芋のご飯、栗ご飯をいただいた。岩田さんが作ったお米はとてもおいしく、自然農法のこだわりに納得ができた。一つ一つ手作業で丁寧に作られたお米は、どこか暖かみも感じられた。

昼休憩の後は、それまでの作業に加え、刈った場所に稲木を組み立てて稲束を干していった。単純な作業だが、地面のぬかるみに足を取られながら稲束を運ぶのはかなり大変で、時には何人かで列になり、バケツリレーならぬ稲束リレーも行った。徐々に体力が奪われ疲労が溜まる中、全員で協力し合いながら夕方日が落ちるまで作業を続けたが、結局１枚の田んぼを終えることはできなかった。約２０という人数がいても１日で終わらない、手作業の大変さを初めて身に染みて理解した。しかも、普段はこの作業をほぼ岩田さん一家のみで行っているということが非常に驚きであった。なぜ、比較的簡単で早く作業を行える機械を使用せず、手で稲を刈るのかを尋ねたところ、手の方が稲の一つ一つを丁寧に刈ることができ、穂先を傷つけることが少ないこと、虫や草花を傷つけることが少ないことなどが理由に挙げられた。岩田さんの米の品質へのこだわりや、自然に対する思いやりが見られた。

2）それぞれの利点

11 月 7 日（土）再び岩田さんのもとに訪れ、脱穀と馬耕と開墾を体験した。脱穀には唐箕と呼ばれる、木製で手動の脱穀機を使用した。教科書でしか見たことのない農具を目の前にし、今でも実際に使用されているということに感動を覚えた。作業は二人がかりで行い、一人が脱穀機上部の穴に籾を入れ、もう一人が脱穀機にあるレバーを回した。すると、側面の大きな穴から小さな草などが勢いよく飛び出し、下部の穴から殻の取れた種が次々に落ちてきた。この脱穀機は、中で風を起こすことで軽い籾殻やゴミが飛ばされ、重い種だけが下に落ちてくるという仕組みであった。岩田さんによると、機械よりも正確に種と種以外を分別することができるという。

続いて、馬耕という、その名の通り馬の力で行う耕作を行った。馬耕では、岩田さんが飼っているという馬に耕作の道具を取り付け、馬が先導し人が道具を操縦した。私たちは初心者ということもあり、なかなかうまく耕すことができずにいたが、耕作後の田んぼを見ると、想像していたよりもちゃんと耕すことができていると感じた。作業に慣れた岩田さんだと、馬は機械のようにまっすぐ、耕し残しのないように進むそうだ。岩田さんが「馬の視点に立っている」とおっしゃっていたのが印象的だった。

馬耕と並行して、放棄地の開墾も行った。放棄されて 20 年ほど経つということで、一面が草木で埋め尽くされていた。大きなシャベルで雑草を掘り起こそうとしても、強く張り付いた根や石によってなかなか土にシャベルが通らず、力と根気のいる大変な作業であった。その代わり、掘り起こせた時は達成感が得られ、楽しさもあった。この日も、気が付けば辺りは真っ暗になっていた。開墾は終えられなかったものの、耕作は終えることができた。今まで実際に見たことがなく想像もできなかった農法を一日中体験し、一番に感じたのは、とにかく大変であるということだった。二度にわたり体験させていただいたが、どちらも翌日には体のどこかが筋肉痛になり、かなりの疲労を感じた。

自然農法を体験する以前の私は、手で刈ることや馬を使って耕すことを、機械を使って同じ作業を行うよりも、体力や時間の消費が多いのだろうという想像力しか持ち合わせていなかった。実際のところ、この想像は確かに当てはまっていた。しかしそれと同時に、手で丁寧に刈ることにより稲を傷つけずに済むことや、田んぼに大きな機械を入れないことで、益虫による害虫駆除が行えて農薬が不要になることなどを知った。一見効率の悪く見える作業の一つ一つにも、機械農法にはない自然農法でしか出せない技があった。それらが質の高い米を生み出したり、人による自然への悪影響を最小限に抑えたりすることを可能にしていたのである。結果的に見れば、自然農法は多方面において利点のある農法であることを知った。そのために体力と時間を多く消費することは、一概に欠点であるとはいえない。それぞれの方法には、その方法を採用するだけの利点があると

いうことに気付いた。

3）生きる上での豊かさ

自然農法を体験した日の昼休憩や作業中の会話において、岩田さんが農作を生業としている理由について伺うことができた。智頭に来る以前、岩田さんは都会で半導体関連の企業に勤めていた。その頃は経済的には裕福だったものの、同じことの繰り返しで仕事にやりがいを感じられなかったという。また、自然災害を経験し、都会での生活に危機感を感じたことなどもきっかけとなり、自然豊かな智頭で、自分の力で生きる糧を得ることができる農作を始めたそうだ。自然農法は常に研究中のものであり、毎回の稲作で少しずつ異なる方法を試しているため、まったく飽きることがないと語っていた。また、岩田さんの奥さんは、経済的には決して裕福ではないが、衣食住は足りており、夫が仕事にやりがいを感じており、子どもたちが自然の中でのびのびと育っている今の生活には十分満足していると語った。私は奥さんのこの言葉が一番印象に残り、改めて、生きる上での豊かさとは何であるかを考えさせられた。

4）違う価値観や視点に立ち、生きる上での豊かさを考える

今回の体験を通して学んだのは、自分の持つ価値観や一つの視点に囚われないということである。自然農法には機械農法にはない利点が多数あることを知ったとき、機械農法よりも体力や時間を消費することを勝手に欠点と捉えていたことに気付いた。今の生活を貧乏と言い切り、それでも十分満足でき、心を豊かにしてくれるものであるという言葉を聞いたとき、経済的に安定していることが生きていく上で一番大切であると捉え、人の豊さの基準を無意識に決めつけてしまっていたことに気付いた。技術や経済の発展を経た現代社会では、人々の生活においても、経済的な安定や効率性、利便性を得ることが重要視されている。しかし、これらを得るために、自分の本当にやりたいこと、楽しいと思えることをできずにいる人も多い。昔に比べて、今の日本の生活は豊かになったと言われるが、このような生活を本当に「豊かな生活」と呼べるだろうか。私たちは、現代社会で重要視されている価値観に囚われ、生きる上で本当に大切なものを見失っているのかもしれない。

自然農法や岩田さん一家の生き方は、今まで偏った価値観に縛られていた自分の考えに多くの変化を与えてくれた。この変化は現地で同じ体験をし、直接話を伺えたからこそ得られたものであると強く感じた。これからは様々な価値観や視点を知り、そのうえで自分を含めた人の生き方や、生きる上での豊かさについて考えを深めていきたいと思う。

6. 異なる価値観

三代健太郎

はじめに

私は基礎ゼミの活動を通して「価値観」と「経験」というものについて学ぶことが出来た。そのきっかけとなったのは岩田さんの田んぼで体験させていただいた稲刈りや馬耕だ。

1）過去との重なり

私たちは10月11日の稲刈りと11月7日の脱穀と開墾の作業に参加させていただいた。岩田さんは機械ではなく手作業で稲作を行っていて、稲刈りも鎌を用いた人力での作業だった。私は稲刈りというものは小学生の頃に授業で少し刈った程度で本格的に作業するのは初めてだった。田んぼに入ると思っていたよりも地面が緩く、足を取られないように動くのがとても難しかった。稲刈りという作業はそれほど難しいものではなく楽にできるイメージを持っていたが、実際は田んぼの中で足を取られながらの作業でただ歩くだけでもかなりの体力を消耗した。また刈り取りの際は稲の高さまで屈みこむために腰への負担が大きく、途中からは腰の痛みを感じながらの作業となった。

図 14：きれいに干された稲

同時並行で収穫した稲を束ねて干せるように結ぶ作業が行われていたが、束が崩れないように結ぶ必要があり、稲刈りとは違い器用さが求められる工程で体力勝負の刈る作業とは異なる大変さがあった。作業を進めるうちに稲を刈る人、稲を束ねて縛る人と分担が生まれ、稲を干す際は全員で稲を受け渡しする流れ作業の方式で行った。この形は誰かが指示したわけでもなく自然に生まれたものであり、作業の手間や効率性の面から必要に応じて出来上がったものだ。恐らく昔の人々も同じように分担して作業を行っていたのだろうと思うと、昔の人々の作業と今の自分たちの作業が重なり合っている気分になり、昔の生活を追体験している気持ちになった。

私たちは朝 9 時ごろから夕方 5 時位まで半日ほど作業をしたが十数人がかりで田んぼの半分程度しか稲刈りすることが出来なかった。私はこれだけ人数がいれば田んぼ一枚ぐらい刈り終えられるだろうと思っていたのでこの結果は驚きだった。同時に自分は手作業での稲刈りのスピードを分かっていなかったのだと気づき、経験がないために現実と自分の予想にズレが生まれたのだと感じた。このことから時間という面でも昔の農家の方々の大変さを実感した。

2）仕事に対する考え方の違い

2 度目に岩田さんの田んぼを訪れた際は脱穀と馬耕、開墾を体験させていただいた。脱穀は唐箕を用いての手作業だった。教科書や博物館でしか見たことのない道具だったのでこの時初めて使い方を知った。馬耕は人が主体となって動かすものだと思っていたが、実際は指示こそ人間が出すが馬がその通り動くとは限らず、どちらかといえば人間が馬に合わせて動くというものだった。開墾は鍬やシャベルを用いて雑草などの余計な植物を掘り起こし、その掘り起こした植物を田んぼの外まで移動させるという作業だった。掘り起こした植物の根には土が付いているため重く、田んぼの外に移動させる作業は相当な力を必要とする重労働だった。

図 15：馬に合わせる

これら 2 日間の作業を体験して感じたのは昔の農家の作業の大変さである。昔の人々は何枚もの田んぼを毎年稲刈りし、そのほかの管理や田植えなども全て手作業でやっていた。学校で昔の人々がどのように作業をしていたのか、情報としては知っていても大変さや苦労は学ぶことはなかった。しかし今回体験したことで昔の人々の生活を一端ではあるが垣間見ることが出来たように思う。

体験を通して沢山の学びを得ることができたが一番印象に残っているのは岩田さんがなぜ農業を始めたのかという話をされていたことだ。岩田さんは元々東京で精密機器を作る仕事をされていた。しかし東日本大震災をきっかけに農業を行うことに興味を持ち、馬耕や手作業での稲作をはじめられた。そんな理由を話してくださった岩田さんが農業を始めたもう一つの理由として「前の職業の時に自分の仕事を子供たちに説明できなかった」とおっしゃっていた。

この言葉は自分にとってかなり衝撃的なものだった。私はこれまで仕事というものに対してあくまでお金を稼ぎ、社会的立場を保障するものとしか考えていなかった。しかし岩田さんの言葉は自分が考えていた仕事の意味とは違ってやりがいや充実感を重要視しているように感じて、大きく自分の考えが揺さぶられた。

3）自分なりの価値観

私が岩田さんの元で体験した中で学んだのは「経験や感覚を大切にすること」と「異なる価値観を持つこと」だ。

人間は経験や感覚をもとに自分の行動を決定する。経験は知識や情報として感覚は感情という形に変わって人の決断を左右する。例えば自分がやったことのない新しいことに挑戦する場合も、様々な経験をしておけば似た経験を探してどうなるのか予測することができる。自分の感覚を大事にしておけば、似た経験がなかったとしても思ったように進むことができる。つまりこの二つを大切にすれば自分自身で決断し行動できるようになるのだ。

岩田さんの奥さんは私たちのような外部の人に体験をさせて下さる理由として「自分たちもいろんな人に会えて楽しいから」とおっしゃっていた。いろんな人に出会っていろんなことを経験することが自分を豊かにする方法の 1 つなのではないだろうか。

「異なる価値観を知ること」というのは他の人やものから別の視点や考えを学び取るということだ。価値観は人それぞれ持っていて、基準となるのは自分自身だ。「経験や感覚を大切にする」ことと「異なる価値観を知ること」が合わさって自分独自の価値観を作ることが出来るのだ。

岩田さんは都会の暮らしを経て現在智頭町で農業を営んでいる。収入の面では都会に住んでいた時の方が高かったそうだが、今の暮らしも充実しているとおっしゃっていた。おそらくそれはお金ではない部分に価値を見出しているからであり、それは自然に囲まれての暮らしなど外部からは測りきれないものだ。

今回のゼミで出会った人々は岩田さんに限らず皆さん充実しているように見えた。そう見えた理由は恐らく皆さんが自分なりの価値観をもっているからだと思う。お金のように客観的に測れるものではなく、仕事への充実感や智頭での暮らしなど本人にしか分からない価値観も持ち合わせているように感じた。色々な人の生活や仕事を知ることで自分自身も

独自の価値観を築けるのではないかと思う。

近年日本では多様性を認めることを求める風潮が強くなってきている。今後その流れはさらに加速すると思われ、今後社会に出て働くであろう私にとっても多様性をうけいれることは必要不可欠になるだろう。そんな世の中で今回岩田さんのような価値観を持っている人に出会って話を聞けたことで異なる価値観や体験の意義について学ぶことが出来た。このことを今後の人生で生かせるように様々な人と出会い、様々な体験をして、価値観について学び、自分なりの価値観を見つけていきたいと思う。

7. 軸のある暮らし

坂本就希斗

はじめに

私が村田ゼミを志望した理由は「フィールドワーク型の授業をしたい」ただそれだけの理由だった。フィールドワークで様々な体験をして、最後に活動報告をして終わり。このような軽い考えでこのゼミを選択した。そのため、1回目のフィールドワークの午前中は、講師の方のお話を必死にスマホにメモをしていた。しかし、このゼミのフィールドワークから学ぶことはメモをして覚えることではないと感じ始めた。講師の方々の仕事、暮らし（生活）などから感じ取ることができたことを自分（田舎）の暮らしと比較することがこのゼミで学ぶことだと感じた。本レポートでは自分なりに感じ取ったこと（学んだこと）を書き進めていく。

1)「自由」に暮らすこと

智頭町で自然農法をしながら暮らす岩田さん一家を講師として、10月11日に稲刈り、11月7日に馬耕、開墾を体験させていただいた。私自身が田舎育ちということから、現地に着いたときも見慣れた景色で特別な感情を抱くことはなかったが、稲刈りを今まで一度も体験したことがなかったことから、ワクワクした気持ちで参加した。実際に作業に取りかかると、刈ってもなかなか減らない稲に気が遠くなったり、馬が思ったように歩いてくれなかったりと想像以上に大変な作業だった。なぜ便利な機械を使用せずすべて手作業で行うのだろう、という疑問を抱いたのは事実である。11月7日には、馬耕と開墾をおこなった。ここでも耕運機を使用せず、時間的に効率が良いとはいえない馬耕という手法をあえて選択していることに疑問を抱いていた。なぜここまで、コンバインや耕運機などを使用せず何倍もの時間と労力を必要とする手作業という、現代日本の米作りの傾向とは真逆の手法にこだわるのか不思議な気持ちだった。しかし作業を進めていく中で、岩田さんの子供たちの様子や、岩田さんの言動は、私の抱えるこの不思議な気持ちを自分自身の生活を考え直すきっかけへと変えていった。

子供たちは、外でリコーダーを吹いたり、道路に寝転がったりと、最近の子供たちからはなかなか見ることができない様子を見せていた。最近の子供たちの多くは、外食先でもゲーム機を使っていたり、小学生からスマホをもっていたりする。しかし、岩田さんの子供たちからは、このような様子がまったく見えなかった。技術が進歩し、様々な機械が普及してきて、便利で自由な世の中になったと考えていたが、果たして本当に自由になってきているのか、私は子供たちを見てそう感じた。私は、写真を撮るたびにSNSで最新情報を取り入れようとしたり、圏外でスマホが使えないことにもどかしさを感じたりと、自分の生活スタイルは本当に自由なのか、世の中の進歩についていこうと精いっぱいの暮らしをしているのではないかとまで感じた。それに対して、岩田さんの子供たちは機械や世の中の流行などに捉われない暮らしをしている。この暮らし方を選択している岩田一家は、うまく言葉に表すことが出来ないが、すごく自由な生き方をしているように感じた。

岩田さんの言動からは岩田さんの世界観を垣間見た気がした。岩田さんの些細ではあるが、一つ一つの責任ある言動は現在の私たちが直面する問題、例えば過度な森林開発や温暖化による環境破壊、食べ物を大切に扱わないフードロス、若者が都会へ流れ込む農山村の過疎化などの問題の解決の糸口になるのではないかと感じた。例えば、人間が中心ではないという視点から虫を丁寧に扱う姿勢、稲の一本を大切に拾う姿勢、また都会の暮らしが必ずしも田舎の暮らしよりも便利なものではないという考え方だ。これらの考えは、一見昔に後戻りしているかのように感じる。しかし、上記した地球規模の環境問題や地域の未来を見据えてみると、後退ではなく、先に進んでいるように感じた。機械を使用しない手作業や自然農法にこだわり続けるのには、岩田さんのなかで最先端を歩んでいる気持ちがどこかにあるからではないかと思った。今回、岩田さんの下で農業体験をさせていただき、普段の暮らしぶりを垣間見たことは、自分の暮らしを見つめ直すことにつながった。最新の機器に囲まれ、便利さを求めて暮らすことが自由な暮らしだと言える訳ではないということに気づかされた。しかし、本当の自由な暮らしとはどういう暮らしなのか確信があるわけでもない。こ

れから様々な暮らし方を体験していく中で、時には自分の暮らしを見つめ直し自分にとっての自由な暮らしを突き詰めていきたい。その見つめ直すときの比較対象として岩田さんの暮らし方を心に残しておきたいと感じた。

2）田舎だからこそできる暮らし

11 月 28 日には「火のある暮らし」という内容で、林業に関わっている赤堀さん、カルボさん、守本さんを講師とし、薪割り、ピザづくりを行った。以前に岩田さんの生活から、発展し続けることが必ずしもいいことではないということを学んだ。その上で、私は発展し続ける都会ではなく田舎で暮らすことにはどんな利点があるのかを突き詰めたいと考えていた。そのため「田舎で暮らすこと」というキーワードを自分のなかで設定し、体験や講師の方のお話からヒントを得ようという意気込みで取り組んだ。実際に体験をはじまると、我を忘れたかのように、ただひたすら楽しみながら薪割り作業をしていた。釜戸で焼いたピザやパンもとてもおいしく感じ、満腹になるまで食べた。屋外で火を焚き、釜戸でピザを焼くという普段の生活ではなかなか体験できない特別感があるからこそ、食べ物もよりおいしく感じる。日常的にこのような暮らしができる赤堀さんの暮らしが羨ましく思えた。

図 16：火のある暮らし

午後からのトーク時間で、私はこの暮らしこそが田舎でしかできない暮らしなのだということを実感した。都会での暮らしを経験しているカルボさんと守本さんのお話のなかで、田舎だからこそできる暮らしのお話があった。例えば、庭で火が使えること、水道をひねれば飲める水が流れることなど、私にとって今まで当たり前の暮らしだと思っていたことこそが田舎だからこそできる暮らしだということに気づかされたのだ。私は今まで山から木を集めて焚火をして芋を焼いたり、スキー場でバイトをして休憩時間にはスキーをするという仕事と遊びの一体感を経験したりしてきた。そのため赤堀さんの生活スタイルには今までの自分の生活スタイルに似ている部分がある。私が無邪気に楽しんで薪割り作業ができたことは、体が勝手に過去の自分の思い出に浸っていたのだろう。普段なにも考えずに生活をしていると、田舎で暮らすことの利点を感じることはなかったが、この日初めて感じることが出来た。

また、赤堀さんの仕事と暮らしの一体感には羨ましさを感じた。自分のことについて語る赤堀さんがすごく誇らしく見え、林業に対する熱意や愛着が伝わってきた。「人生の 3 分の 1 を仕事に費やすのなら、その 3 分の 1 が楽しい時間になれば得だよね」赤堀さんが言われたこの言葉に、赤堀さんの暮らしの豊かさが全て詰め込まれていると思った。所得の良い企業に就職し、休日を趣味の時間に費やす暮らしがあこがれだった私は、赤堀さんのお話を聞いてからはかなり気持ちが揺らいでいる。「自分の信念さえしっかりとしておけば、いろいろなことを経験して、自分がしたいことを見つけていけばよい」と最後に伝えられ、自分が経験した範囲だけで物事を考えていた私は、自分の中の小さな世界でしか物事を見ることが出来ていなかったことに気づかされた。赤堀さんからは、林業を例にした人生の講義をしていただいた気分になった。

3）自分の軸をもって暮らす

私はこのゼミを通して、多くの講師の方々のお話を聞き、自分の暮らしがどういうものなか見つめなおすことが出来た。その中で、新たなことに気づくことが出来た。それは「田舎」で暮らせることが何よりもありがたい、ということだ。今まで 19 年間、ずっと田舎で生活してきたせいか、今ある生活が当たり前だという認識をしていた。よくテレビなどで、都会は星が見えないなどの話を聞くことがあるが、そんなことは赤の他人の話で、自分には全く関係ないという考えをする程であった。しかし、面白いことに都会と田舎の暮らしを両方体験している講師の方々は、田舎の良さを語るだけでなく、都会の暮らしを全く否定していなかった。都会の良さも田舎の良さも知っている。だからこそ田舎の暮らしの良さを話すとき、説得力が強いと感じるのだろう。どの講師の方々も自分の暮らしの感覚（自分の軸）を自分で認識しているからこそ、たとえ一般的な選択とは少し違う選択をしていたとしても自分の暮らし方（自由な暮らし）を貫けているように感じた。だからこそ、彼らの言動に影響力があったのだ。私は、その姿にあこがれた。いまの私は、このフィールドワークから、今後の目標を定めることが出来たように感じている。一度は都会にでて、都会の暮らしを経験する、それから田舎に戻るかそのまま都会に住み続けるかを判断し、講師の方々のように、自分の

選んだ暮らしで軸のある生き方をしていきたい。

8. 仕事のやりがいをはかるものさしとは

山下純一郎

はじめに

私は大学を卒業した後に就職することを考えている。まだ、明確にどの職種に就くかは決めていないが、自分の中では漠然と就職するものだと思っている。このようなことを考えていると、ふと「仕事のやりがい」とは何かという疑問が浮かんだ。せっかく仕事をするのであれば、仕事に対してやりがいを持ちたい。しかし、「仕事のやりがい」と簡単に言っても人それぞれ違うはずだ。経営者であれば仕事のやりがいは業績を向上させることかもしれないし、プロスポーツ選手であれば、試合で結果を残すことかもしれない。「仕事のやりがい」とは職種や仕事歴などによって変化し、人それぞれ違うはずだ。そこで、今回の村田ゼミでは様々な職種に就いておられる方々にお会いできる機会を設けていただいたので、自分がそれぞれの仕事で体験し、感じたことやお話を聞いて感じたことを通して私が将来持つべき「仕事のやりがいをはかるものさし」を見つけ出したいと思った。実際に様々な仕事を体験し、様々な考えを持った人のお話を聞くことで私が今までに持っていた「仕事のやりがい」への印象は大きく変わった。それを以下に記していく。

1）時間や他者に拘束されない自由

2020年10月13日（火）私は鳥取市の青谷町にある夏泊漁港を訪れた。ここでは定置網漁を行っており、かつては朝市も開催されていた。今回はどのように定置網漁が行われているのか体験するために漁船に同伴させてもらった。漁を実際に体験してみることは初めてであったため楽しみであると同時に、船酔いをしないかが心配であった。

図 17：朝日と出港

夏泊に行くために午前5時に大学の正門に集合し、夏泊に着いたのは午前6時前であった。まだ日が昇っておらず、ところどころにある街灯が漁港を照らしていたことを覚えている。漁師の1日の始まりは実に早い。

ちょうど6時をまわったころには日が昇り、周りは明るくなっていた。そして、気づいたころには網が仕掛けられているポイントへ向かうべく漁船に乗っていた。普段は活動していない早朝のため、このあたりの記憶は定かではない。それほど早い時間に漁は行われている。網が設置してあるポイントに着くと漁師さんたちは慣れた手つきで網を回収し、最終的には3〜4メートルの範囲に魚を追い込み、一気に捕獲した。獲った魚を船に載せ漁港へと戻ることになった。船が港まで戻る間、私は立つことができずただただ遠くの景色を眺め船酔いを少しでも良くしようとすることだけに神経を集中させていた。それほどに船上での作業は体力を奪われ、過酷なものである。また、帰路は往路の倍近く時間がかかったような気がした。遠回りをしたはずはないと思うのだが。

漁港に着くと船から魚を運び出し、選別の作業をした。今回はアジや鰆といったよく目にする魚もいればシイラという初めて見る魚も獲れていた。選別は大きさや種類によって分けるのだが、中には弱って腐っているものもあった。腐った魚を触ってみると他の魚より柔らかく、ブヨブヨした感触であった。このような魚が出荷されると大変まずいので、魚の選別をするときは気を付けなくてはならない。選別は慣れると大体の大きさや種類がわかってくるので作業効率が一気に上がり、体感では割と早く作業を終えることができたように思う。選別の作業が終わるころには船酔いもだいぶ収まっていた。

選別が終わるといよいよ出荷の準備だ。選別した魚を決められた数や重さに従って箱に入れていく。私たちが捕獲し、選別、箱詰めをした魚が売られ、そしてどこかの食卓で食べられていることを想像するとなんだかうれしい気持ちになった。自分が朝早くから頑張って魚を獲ったからこそ、食事を楽しんでくれる人がいる。直接楽しんでいる姿は見ることができないが、だれかを支えることができている。そう思うと頑張れる。これも一つの「仕事のやりがい」だと感じた。

出荷が終わると、漁師さんたちがとれたての魚を使った料理を用意してくれていた。中にはもう一度、漁に出る漁師さんもいるそうだが夏泊の漁師さんたちは午前10時前には一通りの仕事を終え、卓を囲みながら談笑していた。この漁業の自由度は「仕事のやりがい」に結びついていると感じた。仲間と談笑するために仕事を早く切り上げる日があってもよいだろうし、いつもより魚を捕獲したいときは再び漁

に出る日があってもよい。天気に左右はされるだろうが、その日その日で仕事をするか否かを自分自身の意思で決定できる。いわゆる会社勤めのように自分の時間や意思を他者に拘束されない。このことは「仕事のやりがい」の一つになるのではないだろうか。

漁師という仕事は朝が早く、船上での作業は肉体的にも精神的にもかなり過酷であろう。しかし、時間や意思を他者に縛られずに自己決定できる仕事だ。締め切りや時間に追われながら仕事をすることもなければ、上司から押し付けられた仕事を嫌々ながらしなくてもよい。あくまで自分の意思で時間を使い、自分の意思でやることを決める。そんな仕事のやりがいをはかる「ものさし」を夏泊の漁師さんたちから学ぶことができたように感じている。

自己決定のある毎日は、人の人生を生き生きとさせるはずだ。他者に決められた毎日をこなすように生きていくよりも、毎日が自分の選択で溢れかえっている人生は変化が起きやすく楽しいのではないだろうか。

2）見つけ出す達成感、充実感

2020 年 11 月 7 日（土）私は智頭町で農家をしている岩田さんのもとを訪ねた。岩田さんは機械に全く頼らず、農業をされている方だ。今の時代に機械を使わない農家がいるのかと私自身疑ったが、実際に機械を使わず農業をしていた。その光景を実際に見たときは驚いた。そして、機械を使わなくとも農業はできるということに気付かされた。

図 18：馬と開墾

この日は馬を使って畑を耕す馬耕と新たに使える畑を増やすための開墾の手伝いをした。馬耕とは畑を耕すために犂を使って土を掘り返す作業のことだ。馬に引いてもらいながら人が犂で耕すのだ。馬耕は、馬の歩くタイミングに合わせながら犂を引くのが難しい。犂を深く入れすぎると馬に負担がかかってしまうので馬が進まなくなってしまう。馬の代わりに私自身も犂を引いてみたのだが、犂が深く入ると全く進まない。そのため犂を入れる深さをうまく調整し、馬と呼吸を合わせながら進むことが馬耕のポイントだと感じた。スムーズに進むと土がきれいに耕すことができ、気持ちよかった。

また、20 年以上使われていない土地を開墾するために雑草や岩の除去作業をした。途中、雨に見舞われながらも地面に根強く成長した雑草を時間の許す限り除去した。根っこから雑草を抜かないと再び生えてきてしまうので、スコップや鎌を駆使して雑草を除去した。一つ一つの雑草が根強く生えているので一つの雑草を除去するにもそれなりの時間と労力は使うのだが、その分抜けたときの達成感は大きい。きれいに抜けたときは気持ちがスッキリする。どれくらいの量を抜いたか正確に覚えていないが、おそらく人生で最も雑草を抜いた 1 日であっただろう。

昼休憩の際に岩田さんにお話を伺うことができた。岩田さんは「東日本大震災で被災したことが農業をする大きなきっかけであり、被災によって露呈した都市の生活の弱さに疑義を抱いた」と仰っていた。この話を聞いて都市での生活は豊かなものであり、必然的に幸せなものだと漠然と私は考えていたが、食糧を地方から供給してもらっている現実を鑑みるとその弱さや脆さと都市での仕事に「仕事のやりがい」を漠然と見出している自分に気づいた。今まで自分では気づいていなかったが、どんな職種でも、どんな仕事内容でもいいから単に都市で仕事をしたいと考えている自分がいたのだ。もし、このままの状態で就職をし、都市での生活を始めたら都市の生活の脆さからだんだんと生活は崩れていき、「仕事のやりがい」にも影響を及ぼしてしまうように思う。そして、「仕事のやりがい」をはっきりと持っていないまま自分は何をやりがいにして仕事をしているのかわからない日がいつか来てしまうはずだ。なので、偏った考えは一度捨て、自分の「仕事のやりがい」をはかるものさしを基礎ゼミで感じ取ったことから見つけ出し、私だけの「ものさし」を見つけ出したいと思う。

岩田さんが農業の前にしていた仕事は一定のノルマをクリアするような、日々繰り返される内容の仕事であったそうだ。そのような仕事内容にも疑義を抱いていたらしい。確かに日々同じようなことを繰り返しする仕事に対してやりがいを見つけるのは自分自身で目標を設定する必要があるため、やりがいを見出すことは容易なことではないかもしれない。そのため、自分自身で「仕事のやりがい」を見つけるためには時間がかかるということを理解しておく必要があるのだと感じた。「仕事のやりがい」とは焦って見つけ出せるような簡単なものではないようだ。

岩田さんが「最悪、自分たち家族が食べられる分の食糧を作ることができたらいい」と仰っていたこ

とや20年以上放置された土地を開墾しようと試みている姿から、岩田さん自身が農業を楽しんでいるように思った。作物を大量生産して利益を大きく生み出すことを目標とせず、新たに挑戦することを目標とする岩田さんからは、「やるべき仕事」と「やりたい仕事」を明確に分けて考えているように感じた。そんな姿は、私の農業という仕事自体への考え方を変えた。これまでは農業と聞くと心身ともに過酷で、お金にならない、時間がかかるといったマイナスなイメージが先行しがちであった。しかし、馬耕でうまく土を耕せたとき、雑草がきれいに抜けたときの達成感は、いまでも私の脳裏に焼き付いている。過酷かもしれないが、そのぶん達成感があるのだろう。

岩田さんのように自分のやりたいことを仕事にするのは難しいかもしれないないが、もしもそれを達成したときには、他には代えがたい充実感を得られることができるのかもしれない。自分自身で「仕事のやりがい」を見つけ出し、それを達成していく。そのやりがいは自分の中で確固としたものとして存在し続けるだろう。達成感や充実感という「ものさし」で仕事のやりがいをはかる考え方を岩田さんの農業から学ぶことができたように感じている。

3)「仕事のやりがいをはかるものさし」の質

2020年11月28日（土）私は林業を営む赤堀さんのもとを訪ねた。私はこの日、薪割りを人生で初めて体験した。午前中はお昼の時間になるまでひたすら薪割りをした。薪割りはやる回数を重ねれば重ねるほど、コツがわかり作業効率がとても向上した。薪の中心からではなく、外側から少しずつ削っていくような感覚で薪を割っていくとスムーズにできる。自分の技術が上達していく様を身をもって感じることができて、薪割りは大変楽しかった。

お昼の時間になると休憩をはさみ、ドラム缶で火を焚き、ピザやパンを焼いて食べた。手作りピザの味は格別だ。また、ドラム缶から伝わる暖かく、そして優しい火の温もりは薪割りをして疲れた体を心から優しく包み込んでくれた。私の普段の生活には火の暖かさや温もりを感じることはない。だからこそ、赤堀さんの生活にはこの優しい温もりが組み込まれていると思うと、なんて贅沢なことなのだろうかと感じた。

休憩の後、赤堀さんにお話を伺うことができた。現在、赤堀さんは代々林業を営む家を継いで、家業として林業を営んでいる。しかし、若いころは都市で生活をしており、都市と地方のどちらでも生活をした経験があるそうだ。そんな赤堀さんだからかもしれないが、都市での生活を否定したり、地方での生活を否定したりすることは決してなかった。また、お話の全体を通して赤堀さんは生活や都市と地方、仕事といった全てのことに対して柔軟な考えを持った人であるということが聞き手である私たちに伝わってきた。赤堀さんも「自分の軸を持ちながらも色々な視点や考え方をもって欲しい」と仰っていた。ここでいう「自分の軸」とは自分の中にある譲れない考えであったり、信念であったりであると思う。しかし、その考えを他者に強引に押し付けたり、固執したりしすぎると、頑固で身勝手な考えを持った人になってしまうので、「自分の軸」を持ちながらも他者の意見を聞いたり、考えの違いを認めて尊重したりすることが必要になると思う。この柔軟性のある考え方を持つことは仕事をするうえでは一つのことにとらわれず、仕事へのやりがいを見出すために役立つと思う。

図 19：ドラム缶とピザ

私は、自分の「仕事のやりがいをはかるものさし」を手に入れることができたら、次の段階として、そのものさしの質を上げようと思う。そのために必要なことは、他者の持つ「仕事のやりがいをはかるものさし」と自分の持つ「ものさし」を比較する必要があると思う。比較するとは、違いを見つけ否定するのではなく、違いを見つけ新たな考えとして尊重し、吸収することだ。これを実践することができれば、赤堀さんが仰っていた色々な視点や考え方をもって「仕事のやりがい」を新たに見つけることができるはずであるし、「ものさし」の質を上げることもできるはずだ。

4）それぞれのものさし

このレポートで、私は「仕事のやりがいをはかるものさしとは」について深く考えてみた。そして、その「ものさし」は人それぞれに存在し、決して同じようなものはこの世に存在しないのではないかと思うようになった。漁業のように時間に縛られない自由な「仕事のやりがい」もあれば、岩田さんの農業のように自ら「仕事のやりがい」を見つけ出し、目標を達成することで、充実感を得る「仕事のやり

がい」もあった。今回見聞きしたわけではないが、その他にも経営者として「仕事のやりがい」を業績の向上にすることもできるかもしれないし、プロスポーツ選手であれば、試合で結果を残すことかもしれない。「仕事のやりがい」とは、ここでは挙げきれないほどに存在するはずだ。そして「仕事のやりがい」は皆が同じような「ものさし」を持ってはかることはできない。そのため、私は仕事のやりがいをはかるものさしをひとつに定義せず、私自身の軸となる世界に一つしかない私だけの「ものさし」を大切に持つことにする。そうすることで、私は将来、仕事を十分に楽しむことができると思う。さらに赤堀さんが仰っていた「自分の軸を持ちながらも色々な視点や考え方を持つ」ということができれば、他者がしている仕事や他者が持つ「仕事のやりがいをはかるものさし」に対しても理解を示すことができるはずだ。

私は、今回の村田ゼミを通して「仕事のやりがいをはかるものさし」は各個人にあり、世の中に一つとして決して同じものは存在しないことを学んだ。そして、自分の軸となる「ものさし」を他者の軸となる「ものさし」と比較することで私自身が持つべき「ものさし」を見つけられると思う。つまり、他者を知ることで、己を知ることができるということだ。そのため、社会人として仕事をするようになったときに私だけの「仕事のやりがいをはかるものさし」をしっかりと握りながらも他者の持つ「仕事のやりがい」を尊重し、他者の考えを吸収することで私が持つ「仕事のやりがいをはかるものさし」の質をさらに上げられるようにしたいと思う。

9. その地でしか味わうことのできない幸せ

橋田凛

はじめに

私はここ鳥取県で生まれ育ち、都会暮らしというものを経験したことは無い。いわゆる「田舎」と呼ばれるようなこの場所から、「都会」へ出ていきたいと思うことがこれまでに何度もあった。私の友人たちの多くも、高校卒業後は進学を機に東京や大阪などへ出ていってしまった。都会と比べると何をするにも不便に感じ、人口減少や少子高齢化、雇用機会の減少など地方が抱える様々な課題について耳が痛いほど聞いてきたためか、将来ここに住み続けることへの不安も心の中にあった。もちろん地元に愛着はあるためできることならずっとこの場所で暮らしたいが、都会に出ればもっと幸せな暮らしができる、そう思い込んでいた。

私はこの短期間のフィールドワークで何度も智頭の町を訪れた。智頭町に足を踏み入れるのは私にとってこれが初めての機会であったが、同じ町のなかでも多様な生き方を体験することができ、いくつもの気づきや学びがあった。そして、智頭町だからこその幸せな暮らしを肌で感じることができた。

1）豊かさとは

10 月 11 日（日）に私たちは自然栽培に取り組む岩田さんのもとへ訪れ、稲刈り作業の体験をさせていただいた。私は祖父がコンバインに乗って収穫する様子くらいしか見たことがなく、初めて手作業での稲刈りを体験した。自分の手で稲に触れながら作業する中で、一束刈るのにもかなりの力がいるくらい太くて丈夫な稲に驚いた。また作業中には様々な生き物を発見し、作業に集中していたせいか普段は苦手な虫もそのときは何とも思わなかった。こうした自らの手で触れながら作業することで見えてくる発見や疲労は、共に大きな達成感を肌で感じさせてくれた。たった 1 日ではあったが、作業を手伝わせていただいたからこそ見えてきた自然栽培の魅力がそこにはあった。またこの作業を経験したことで、農薬を使わずに育てられた作物に対する安心感が私の中に芽生え、それと同時にこれまでは当たり前のように口にしていた食品に少し不安を覚えた。

約 1 か月後の 11 月 7 日（土）には再び岩田さん一家を訪れ、脱穀や馬耕を体験させていただいた。脱穀では、ハンドルを回して起こした風の力によって籾を選別することができる「唐箕」という道具を用い、馬耕の際は「犂」という木と刃を金具で取り付けただけの一見シンプルな道具を馬に引かせ作業した。限られた素材から作られ、風や馬のような自然の中の力のみを使って動くという、単純なようでよく考えられた構造をもつ道具たちを自分の手で実際に扱うことによって、私たちの先祖の知恵を感じ取ることができた。人通りが少なく自然に囲まれたその場所はどこか非日常的な空間のように思え、学校とバイトの繰り返しで時間に追われるような日々から解放され、ただひたすら農業というものに向き合った。慣れない農作業に体はかなり疲労を感じていた

図 20：岩田さんの豊かさの形

が、一方でこの場所で過ごした時間は私の心に癒しを与えてくれた。

岩田さんの奥さんが「自分たちの手で作物を育てていくうちにどんどん心が豊かになっていくような気がする」とおっしゃっていたことが強く印象に残っているが、ここでの体験を通してその意味が少し分かった気がした。たった二日間の経験のなかでも驚きや達成感、癒しなど様々な感情を味わい、私がイメージしていた人やモノが溢れているような都会の暮らしの豊かさとは違う、心の豊かさが育まれ幸せを感じることのできる暮らしがこの場所にあるのではないかと思った。

2）馴染みのあるモノを大切にする

11月28日（土）には、赤堀さんのもとで「火のある暮らし」をテーマに薪割やピザ作りを体験させていただいた。現地についてすぐ見えてきたのは茅葺屋根の住宅であった。近づいてみると、その壁はザラザラした土壁であることが分かった。かなり歴史がありそうな造りだったが、その割には綺麗な状態が保たれていて驚いた。また赤堀さんは林業を仕事にされていることもあり、今も薪ストーブを使ったり薪でお風呂のお湯を沸かしたりしているとおっしゃっていたことにも驚いた。私たちが薪割りの作業をした場所の近くには「室」という現代でいうところの冷蔵庫があり、現在も使っているというその中を見せていただくこともできた。このような古いものに囲まれた生活空間を目にし、赤堀さんは古くから残るものを大切にされているのだな、と私は思った。また、赤堀さんは「この町のためにも、食べ物もできるだけ智頭のものを選びたい」という話もされていたことが印象的だった。一連のお話を通じて、赤堀さんはただ古いものを使い続けているのではなく、自分が生まれ育った場所を大切にしたいという思いから、自分の体に馴染みのあるモノを選ぶというこだわりを持っておられるのではないか、という考えに変わっていった。便利で新しいものがどんどん出てきている今の時代に、昔から変わらず近くにあり、自分に馴染みのあるようなモノを常に選びとるというのは簡単にできることではないが、私はそのようなモノを大切にしたいという想いにはとても共感できた。というのも、私は一人暮らしを始めてから地元に帰る度に、その場所の人やもの、景色といった馴染み深い存在に触れると何とも言えない安心感を抱くようになったからだ。そんな心を落ち着かせてくれるものが存在し続けるためには、モノで溢れる世の中で、それらを変わらず選び続けることが大事なのだと赤堀さんの暮らしから気づかされた。そして私も自分が生まれ育った場所やそこで触れてきたモノを守っていくために、例えそこから離れた場所にいようとも、自分にとって馴染みのあるモノたちと関わりを持ち続けようと思った。

3）その地でしか味わうことのできない幸せ

岩田さんや赤堀さんの暮らしをほんの一部ながら体験することができ、私はこれまで人やモノで溢れている豊かさがあり、新しくて便利なものを簡単に手に入れることのできるような環境で暮らすことが幸せである、という考えに囚われてしまっていたことに気が付いた。また同じ智頭という場所に暮らす二人でも、岩田さんは新たな場所で自然栽培に取り組むなかで心の豊かさを育む、赤堀さんは生まれ育った場所を大切にしていく、といったようにそれぞれ違った目的を持ち、違ったかたちの暮らしを送っていた。ただ共通して言えるのは、どちらも智頭にいるからこその暮らしを楽しみ、そこでしか味わえない幸せを見つけている。つまり、都会だから幸せに暮らせる、田舎だから幸せになれない、ということではなく、どんな場所でもそこでしか味わうことのできない幸せの形があるのだということに気づかされた。

図 21：赤堀さんの幸せの形

私自身、将来は地元に残るのか別の場所に移るのかまだ分からないが、その選択をする前にまずはこれまでの思い込みを捨て、自分の生まれ育ったこの場所でしか味わえない幸せとはどんなものなのか、これまでの経験を今一度見つめ直そうと決めた。そしてこれからはどこにいようといま自分の居る場所でしかできないことは何なのかを考え、それを大切に暮らしていきたいと思う。そのなかでフィールドワークを通して出会った方々のように、自分なりの幸せな暮らしを見つけていきたい。